

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.050; 序文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 横山, 廣子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1764

序 文

横山 廣子

本書は、国立民族学博物館でおこなわれた文部省国際シンポジウム「民族の文化とその政治経済学—東アジアの少数民族を例として」の成果を報告するものである。このシンポジウムは、東アジアの少数民族に焦点を当て、民族集団、文化、地域社会、国家をめぐる最新の状況を明らかにし、その問題点を学際的に議論することにより、現代世界の民族集団と文化にかかわる諸問題解決のために、地域を超えた展望を開くことを目的として開催された。

冷戦構造が終結して以来、「民族問題」は現代世界における紛争の主要因として一段とクローズアップされるようになった。他方、複雑な民族構成を持つ国家の中には、民族集団のよりよい共存を目指して多文化主義政策を進めようとする姿勢が見られるが、そこでも対立や矛盾などさまざまな問題を抱えている。これらの事態が示しているのは、従来の二極化したイデオロギーの対立軸が消滅し、国際社会の再編成が進行する中、これからの時代に私たちが直面する世界の諸問題の多くが、民族集団とそのアイデンティティを支えている文化をめぐる展開するであろうということである。

ある地理的空間において言語、宗教、風俗習慣などの文化的特徴を共有する人々の単位をネイションにとらえ、それが中核となって国家が構成されるべきであるという近代のナショナリズムは、民族集団ごとに固有の伝統的文化が存在するという固定的で静態的な文化の概念に通じるものであった。それは、国家の側には、国民国家のモデルを与え、国民文化の創出という課題を意識させることになった。

しかし、近年の人類学・民族学では、文化は、過去においても、現在においてもさまざまな意味で流動的・可変的であり、ある統合された文化が人間の集団と一対一に対応しているというよりも、文化は、それを担う人々の政治的・経済的脈絡の中で、常に再編成を繰り返すプロセスとして捉えるべきであると考えようになってきた。また、国民国家モデルの虚構性は、今日の、国境をはじめとするさまざまな境界を越える人、もの、情報の移動とネットワークの拡大の中で、ますます明らかになり、私たちは国民国家を超える新しい国家像とそれに基づく国際秩序を模索している現状である。そのためにも現在、世界各地で民族をめぐる生じている諸現象を正確に捉え、分析する必要がある。

たとえばある人々の生活の中からある部分が抽出され、その民族集団の伝統文化の名の下に、それが観光化の商品として開発され、加工され、消費されるといった現象がある。また、国家の文化・民族政策が文化変化のあり方を大きく左右することもある。文化現象は、政治経済学的視点から動態的に分析する必要があり、そこから生まれる新しい文化の視座から、国民国家の理念も再考されるべきであろう。さらに、民族紛争、環境、

人口移動、コミュニティ形成、貧困などの課題をより深く理解し、効果的に解決する上でも、民族に関連する文化的事象を人類学・民族学とその周辺諸科学の多角的視点を通して考察する必要がある。

特定の娯楽や芸術、機器、ライフスタイルなどが瞬く間に全世界的な広がりを見せる今日、文化再編のプロセスは特に速度を早めて進行し、それに伴う葛藤や摩擦、対立といった問題も急展開を見せている。ことに東アジアは、現在、世界で最も急速な経済発展を遂げつつある地域を含んでおり、また、近代化を先導した西欧とは系譜の異なる文化的伝統基盤を有していて、諸問題が先鋭化して存在していることがある。その中でもとりわけ、それぞれの国家の内部で地理的、文化的、政治的、経済的に周縁部に位置づけられやすい少数民族においては、現代社会の矛盾がしばしば集約的に発現している。今、彼らの現状を正確に把握し、よりよい問題解決の道をさぐることは、少数民族だけの問題に留まらず、今日の全地球的課題の解明につながるであろう。

ここに収められた各論文の議論内容は、民族意識の高まりの中で生じてきた民族運動の様相や同時に起こりうる諸問題の回避に向けた対処法、エスニシティの様態に対する国家政策や歴史の関与、民族文化や民族間関係の再編の状況、新しい民族理論の探求を含むものである。本書ではそれをⅠ. 民族意識の高揚と民族、Ⅱ. 国家・社会・民族、Ⅲ. 変動する社会と民族の諸相、Ⅳ. エスニシティと民族理論の探求、の4章に分けて収録し、各章末にシンポジウムで提出された関連のコメントを掲載した。個別の論文ごとの内容については、巻末に日本語、中国語、英語の3言語による要旨を掲載したので、それを参照されたい。

本書の元になったシンポジウムでは、日本語、中国語、英語の3種類の言語が使用され、同時通訳を介して議論が交わされた。本書に論文およびコメントを収録するに際しては、それらを必要に応じて別の言語に翻訳し、全体として使用言語を一つに統一して編集することをしなかった。したがって論文およびコメントは、執筆者の選択に基づき、日本語、中国語、あるいは英語のいずれかの言語によって書かれ、そのまま収録されている。このような編集形式を選択した主な理由は、多言語による情報発信とともに、東アジアを領域として研究する者がとりわけ気をつけなければならない用語と概念の問題に留意したためである。

今日、アジアにおいてであれ、西欧においてであれ、研究者が民族の文化や国家、アイデンティティなどについて論じる際、用いられる主要概念は、ほぼ西欧起源の概念と言ってよいであろう。これらが東アジア諸国において、それぞれの言語に翻訳される時、東アジアの文化的伝統に由来する一つの特徴が見られる。つまり、東アジアには漢字というアルファベット表記とは異なる特色を持つ文字媒体が存在し、漢字の母国である中国以外の地域においても、西欧起源の概念の現地語への翻訳において、重要な役割を果たしている。私はこの序文で英語の *nation* に相当する日本語として片仮名の「ネイション」

を使用した³が、nation は日本語ではこのほかに国民、民族、あるいは国家というように、場合によって意味内容あるいはニュアンスを異にする別の訳語が当てられることがある。identity、modernization などの用語にも同様の状況が見いだせる。そして漢字の翻訳語・概念とその用法や意味については、東アジアの地域間で、差異やずれが見られる。巻末につけた要旨を作成する際にはそのために困難に突き当たり、その都度、対処が求められた。たとえば modernization に相当する中国語の「現代化」を日本語に訳出する際、敢えて日本語で一般的な「近代化」ではなく、「現代化」としておいた個所がある。

これらの用語と概念の問題の中に、私たちは、東アジアの各地域間、あるいは西欧と東アジアとの間の歴史的、思想・哲学的、政治的、社会的な背景の違いを見出すことができる。そして、それらの差異やずれを互いに確認し、理解することを通し、分析概念と現実の両面に対して、さらに洞察を深めることができるのではないだろうか。これは単なる翻訳の問題にとどまらず、表象論的問題にもつながっていく。このような点も含めた議論がさらに東アジアからの新しい学問的発信につながっていくことを期待したい。

シンポジウムが平成9年2月半ばに開催されて以来、本書の刊行までに長期を費やしたのは、ひとえに編者の力不足によるものである。その間、各地の情勢や研究においては新しい進展も見られるが、本文の論文・コメントはシンポジウムにおける議論を反映させたものであり、特に明記してある部分以外、原則としてその後の新しいデータを盛り込んだ議論を付け加えていない。しかしながら、そこに展開された議論の持つ意味は、現時点でも失われていないと考えている。多言語使用の編集形態による本書の刊行が、異なる文化・言語を跨いで進展する今後の研究の一助となれば幸いである。

なお、シンポジウムの報告のうち、次の2論文についてはすでに下記のような形で刊行されているので、そちらをご参照いただきたい。

庄司博史

- 2003 「中国少数民族語政策の新局面—特に漢語普及とのかかわりにおいて」『国立民族学博物館研究報告』27(4): 683-724, 国立民族学博物館。

塚田誠之

- 2001 「チワン族の『三月三歌節』にみられる文化変容とその背景」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』pp.89-106, 世界思想社。

